

ブログ「野次馬雑記」より

No110 1968—69年 全国学園闘争 龍谷大学編



全国学園闘争シリーズ5回目は、京都の龍谷大学。

龍谷大学は、1639年に西本願寺に設けられた「学寮」にはじまる、370年もの歴史がある西本願寺の宗門大学である。

宗門大学ということで「浄土真宗の精神」が、龍谷大学の建学の精神ということになる。

龍谷大闘争の様子が朝日ジャーナルに掲載されているので見てみよう。

【学園ハガキ通信】朝日ジャーナル 1969. 10. 26（引用）

『僧に非ず俗に非ず(竜谷大)』

青年とともに学び問題を解決していた親鸞、国家権力と対決し抵抗していた親鸞、しかしながら、今ある親鸞精神とはなんであろうか。

仏教そのものが門徒から寄付金を搾取するものでしかありえないし、西本願寺そのものが、そのための機構でしかありえない。

仏教そのものが「死体埋葬業」と言われるまでになり、ただ形式どおりの念仏をとるものとなってしまった。このような状態においても、何ら対応策を考えない。

西本願寺があるというだけで仏教があるというような幻想を作り上げてしまった。

本願寺はまた、ハレンチにも竜大にまで介入してきた。竜大は本願寺のためにあるのではなく、全人民のためにあるのだ。

われわれはこのような介入を許すことはできない。

本願寺宗教権力下にある竜大に全学無期限バリケードを築くことによって、僧侶大量養成所＝竜大の機能をマヒさせ、本願寺との関係を断ち切り、日大闘争で表現された破壊の思想をもって、西本願寺宗教権力を徹底破壊してゆかねばならない。

破壊こそが、あの「教行信証」にある「主上臣下法に背き義に違し」「すでに僧に非ず俗に非ず」の精神である。

(竜大仏教闘争委員会のパンフレット「非僧非俗」No4 から。なお竜大は 9.12 より全学無期限バリケードを築いている。)(文学部・白須浄真)』

このバリケードは約 50 日続くが、バリケードを築いた当日、同じ仏教系の京都女子大とともに西本願寺突入闘争が闘われた。(写真は毎日新聞から転載)

【西本願寺に 1000 人乱入】毎日新聞 1969. 9. 13 (引用)

『“学生一揆”に法灯大ゆれ 重文もメチャメチャ「大学への介入やめよ」

京都・西本願寺へ 12 日午後、同宗門立竜谷大全共闘、京都女子大全闘委などの学生約千人が「本山の大学への不当介入粉碎」「本山解体」などを叫んで押しかけ、警官のピケを破って境内になだれ込んだ。学生たちは土足のまま西本願寺で最も神聖とされる御影堂と阿弥陀堂に“一向一揆”のむしろ旗を先頭に突入。重文御影堂の障子 2 枚をこわし、投石で柱に無数の傷がつくなど大荒れ。

防戦に出た本願寺職員と衝突して双方に約 40 人の負傷者が出た。

この日正午過ぎから、竜大深草学舎(京都市伏見区)で、竜大全共闘、同ベ平連、同ノンポリ・ノンセクト連合、京都女子大全闘委など主催の「大学立法粉碎、本願寺不当介入粉碎集会が開かれた。

この後約 1,200 人が市中デモをし、午後 3 時過ぎ、下京区の西本願寺総門前に着いた。

届出のコースは、ここから南下して西本願寺隣の大宮学舎に向かうことになっていたが、先頭のヘルメット学生約 100 人は、警官約 20 人と警察のトラックでつくっていた総門前の阻止線を一気に突破して構内になだれ込み、続いて他の学生も全員構内に突入した。

正面の重要文化財御影堂(大師堂)前の広場を埋めた学生たちは「本山の不当介入抗議集会」を始め、御影堂の階段に土足ですわり込み、さい銭箱の上に乗って次々と本山批判の演説をした。

同 3 時 40 分、リーダーが「責任者の太田淳昭総長が現れぬなら土足で本堂に踏み込む」と演説。

ヘルメット学生約 100 人が土足のまま御影堂階段から回廊で駆け上がった。

本山側は若手職員、信者、学生ら約 50 人が廊下に待機していたが、学生はこの列に突っ込み、旗ザオを振ったり、なぐりあいの乱闘となった。

階段下の学生からの砂利やこぶし大の石が投げられ、正面の障子や柱に傷がついた。

本山側はあわてて同堂の板戸を降ろしたが、学生の体当たりで障子 2 枚がこわれた。

いったん突入をあきらめ集会を再開した学生たちは、同 4 時 10 分、今後は御影堂の回廊を土足でデモしたあと、約 70 メートルの廊下(重文)を駆け抜け、北隣の阿弥陀堂(本堂・重文)回廊へも乱入、ここでも職員と衝突、投石を繰り返した。

同 4 時半、学生たちは境内から大宮学舎構内に移り集会「今後も本山との対決を強める」と氣勢をあげて散会した。(中略)

対立のきっかけは竜谷大が 8 月末に発表した「竜谷大学改革試案」。この中で大学側が「学長には僧籍は必要でない」としていることに、同本願寺が「僧籍が絶対に必要だ」とクレームをつけた。

学生たちは「不当介入だ」と本山を批判していた。(後略)』

“一向一揆”のむしろ旗を掲げて 1,000 名の部隊が西本願寺に突入、宗教系大学はラディカルですね。



全国学園闘争シリーズ第7回目は京都の立命館大学。

立命館大は、1981年、広小路から衣笠に全学部が移転してしまっており、写真を撮る意味もないので、今回は現地調査をしなかった(京都まで行けない)。(写真は毎日グラフから転載)

この立命館大学の闘争の様子が毎日新聞に掲載されているので見てみよう。

【「日共王国」に反乱の火】1969. 2. 13 毎日新聞(引用)

『全国の大学が学園紛争にゆらぎ、消え去っても最後まで“生き残る”だろうといわれた京都の立命館大学にいま大きな騒ぎが持上がり、その存廃を問われている。

全国の大学関係者の称賛のまどだった「立命館民主主義」そのものが学生たちから「これでいいのか」ときびしく“告発”されているのだ。

12日午後開かれた全共闘主催の大衆団交でも、末川総長は約二千五百人の学生を前に「立命館民主主義の形がい化と私の怠慢に対するそしりは甘んじて受ける」と学生の前に首をうなだれた。“形がい化”の中身とはどんなことだろうか。

<「理想の学園」が・・・>

立命館大学といえはいまから20年も前から総長選挙への学生の参加を実現させたほか、理事者、教授、職員、学生の参加する全学協議会、学園振興懇談会、問題があるたびに各学部で開く“五者会談”(大学側3人、学生側2人が出席)を設けるなど、学生参加の“教祖的存在”。

学園には対話の花が咲き、授業料は格安で、なんら文句のつけようがない「理想の学園」というイメージがあった。

東京大学が11日に批准した“15項目確認書”などはすでに20年も前から実践してきた大学。その立命館大学が大きくゆらいだのだ。

<学園新聞を押さえろ>

騒ぎが持上がったのは、昨年12月12日午後1時過ぎのこと。

「立命館学園新聞社」に日共系の学園振興懇談会委員長ら十人の学生が押しかけ「学園新聞を“民主化”するために入社させろ」と迫ったことから始まった。

「学園新聞は大学全学の意見反映の場でなければならない」「立命館全学友の利益になる新聞づくりを」と口々に呼号する十人の学生とその応援グループはそのまま編集室に乱入「入社時期(4-5月)をとくに過ぎたいま、大量入社は認められない」とはねつける編集部員とにらみあい、乱闘さわぎにまでなった。

学園新聞の奪いあい。いま全国各地の大学で、日共系、反日共系の間で激しくくりひろげられている闘いのひとつだ。

日共系は「学園新聞の民主化」を唱え、逆に反日共系は「日共＝民青のいう“民主化”とは実際は“民青化”でしかない。新聞のセクト的乗っ取り反対、報道の自由を守れ」と反論する。

そして立命館学園新聞は、反日共系の中でももっとも先鋭的なグループなのだ。

立命館大は理事会、教授会、学友会、教職員組合、生協、生協労組と日共系がつぎつぎに勢力化におさめていった。知る人ぞ知る“日共王国”。

それだけに“日共の一元支配”にたてつく学園新聞は日共系にとって目の上のタンコブ的存在だった。こうして“集団入社強要事件”が起こった。

しかし、日共系のこの強行戦術が、結果的には裏目に出た。寝た子を起こす結果となった。

それでなくとも「立命館は日共の一元支配・赤い巨塔」「末川総長は日共にあやつられるロボットでしかない」とふだんから息のつまる思いがしていた“一般学生”が一斉に立ち上がり、日共攻撃を始めたのである。

とくにこの事件に対してとった大学当局、教職員組合などの態度があいまいだったため、学生の憤激は高まり「立命館民主主義とは立命館民青主義でしかなかったのか」という思いを強くさせることになった。

平和な学園は大きくゆれ、反日共系の学生は「大学の権力を握った学友会＝日共勢力が自分の思いどおりにならない新聞社を乗っ取るために、あらゆる手続きを無視し、ソ連を中心とするワルシャワ条約機構軍がチェコ侵入を行なったとまったく同じ行動をとった」と一斉に反撃を開始した。

そして1月16日には寮生が中心となって“民主立命の徹底した告発”をかかげて、大学本部のある中川会館を封鎖、占拠、東大安田講堂のあとを追った。

<一般学生と乱闘>

日共系もただちに反日共系締出しに転じ、22日深夜“外人部隊”を含めた五百余人が中川会館に攻撃をしかけた。

放水、投石、乱闘とあとはおきまりのコースだが、このあとただ立命館ではよその大学には見られない“珍現象”が起こった。

体育会の呼びかけで六百人近い“一般学生”が間に割ってはいり、日共系学生に「攻撃はやめよ」と迫ったのだ。

日共系は「こいつらは一一般学生じゃない。“かくれ三派だ”」となおも襲いかかり、あろうことか日共系と一般学生との乱闘にまで発展した。

よその大学では“一般学生”をあれほど大切にしている日共系が、と目を疑うばかりの状況。しかも大学当局

がなかば公認しての日共系の攻撃だけに一般学生たちはますます大学攻撃の火の手を強めた。(後略)』(つづく)

NO136 1968—69年 全国学園闘争 立命館大学編その2



前回に引き続き立命館大学の闘争の様子を紹介する。

69年1月22日の日共系による封鎖中の中川会館攻撃関係の記事が朝日ジャーナルに載っているの
見てみよう。

【関西にみる東大紛争の衝撃】1969. 2. 9 朝日ジャーナル (引用)

『(前略)

代々木系の誤算は立命館大学でもっとも鮮明にあらわれてくる。

立命館大学でも京大と同じく、22日夜、大学当局から黄色ヘルメット500個が配給され、京大学生部に武装部隊が突入したほぼ同時刻に、ゲベ棒部隊約200人が封鎖された中川会館に突撃した。

すじ向いから中川会館を見下す存心館屋上には、援護射撃のため数百人の投石部隊が配置され、京大と同様、放水もおこなわれた。しかし、中川会館は陥落しなかった。

というのは代々木ぎらいの体育部を中心とする一般学生が毎日つめかけており、その日は千人以上にもふくれ上がって、武装突撃隊の前に立ちふさがり、素手のうずまきデモで武器を奪って、校門から放り出してしまったからである。

実は代々木系は、これに先立って“暴力学生”実力排除に関して、全学同意をとりつけようと着々と手を打っていた。

18日には代々木系が牛耳る五者共闘(一、二部学友会、生協理事会、同労組、教職員組合)と大学当局との間で「封鎖解除、中川会館内に軟禁されている学寮委員の身柄釈放を20日正午までにおこなえ」という「寮連合」(封鎖派)に対する最後通告を決定。

20日には大学当局と五者との共催で五千人を集める全学集会を開き、即時解除を決議する。(中略)

そしてこの日は、代々木系学友会一派が封鎖解除に押し寄せたが、体育会などの学生が間にはいつて收拾してしまう。

ここで代々木系は戦術をきりかえ各学部五者会談と拡大学院振興懇談会を開いて、実力解除の大義名分をとりつけようとする。(中略)

学友会は代々木系が牛耳っているが、学部長も半数が代々木系だといわれ、実力解除、武器供与は簡単に決まった。

ところが、話し合い路線を主張する林屋辰三郎文学部長は、実力解除、学部長の自己批判を叫ぶ代々木系学生に一晚抵抗したあげく、22日の理事会に辞表を提出、これに文学部三役の山本幹雄教授と佐々木高明助教授がならった。

さらにノンポリの名和献三・経営学部長と橋本次郎、理工学部長が辞表を出し、理事会の崩壊によって拓大振懇は宙に浮いてしまったのである。

こうして立命館では京大のように全学一致による武力解決がとれなかったため、理事会は急遽平和解決に方針を改める。

が、この方針変更が武装突撃隊に伝達されないうちに、戦端が開かれてしまった。

ということは、京大と同時期に、大学の“正規軍”として攻撃を開始するという代々木系上部のスケジュールが、簡単に変更できなかったからであろう。(後略)』

翌2月20日、2月18日のゲバルトを口実に機動隊が学内に入り、中川会館の封鎖は解除される。(写真は18日の様子。朝日新聞報道写真集より転載)

【立命館大にも警官隊】1969. 2. 20 毎日新聞(引用)

『乱闘事件 要請なしの“独自搜索”

京都府警本部は20日午前7時40分、大阪府警からの応援500人と府下28署からの約100人を含む制私服警官千八百人を動員、大阪府警のヘリコプター、警備車2、放水車、無線車各1台を装備、京都市上京区河原町広小路の立命館大学広小路学舎を搜索した。

学生の抵抗はほとんどなく、凶器準備集合罪、公務執行妨害、傷害、暴力行為容疑で先月16日いらい反代々木系学生が封鎖する本部、中川館をはじめ、18日夜から19日朝にかけて大乱闘のあった存心館および周辺広場など4ヶ所を検証した。

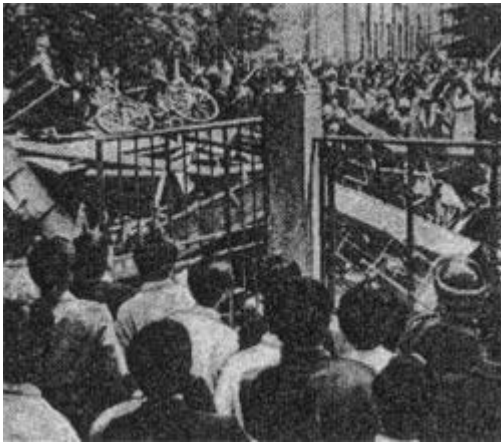
この間、学生約500人が西門にまた約400人が中川会館前広場にすわり込んだが、小ぜり合い程度で大きな混乱はなく、検証は急速度で進められ、同9時すぎ学生1人(黙秘権行使)を市公安条例違反現行犯で逮捕、警官2人が2日間のケガをしたほか学生数人も軽いケガをした。

同大学では去る18日夜、法学部の反代々木系学生が存心館を占拠したのをきっかけに、同館にたてこもる反代々木系と、その奪還を目ざす学友会の代々木系学生が18時間にわたって投石、放水、角材による乱闘を重ね、19日午後零時半、反代々木系の退去で存心館は封鎖解除されたが、学生約100人が重軽傷を負った。(うち1人重体、2人重症)

府警は19日最高幹部会議で強制立ち入り捜査の線を決めて末川博総長に協力を要請、学内立ち入りを反対してきた同総長も「自主解決は目ざすが、法による捜査ははばめない」との態度を示したもの。

学園紛争の対立をめぐる乱闘事件で大学側の要請なしで立ち入り捜査するのは関西ではこんどがはじめて。

また、立命館大に警官隊が入るのは戦前戦後を通じて最初で、封鎖中の中川会館は1月16日から35日ぶりに解除された。』(つづく)



No136 に引き続き立命館大学の闘争の様子を紹介する。

【立命館大に機動隊 学生と衝突】1969. 5. 20 毎日新聞（引用）

『20日午前7時ごろ、京都府警は機動隊約400人を動員、全共闘学生がたてこもっていた立命館大恒心館（京都市上京区）の封鎖を解除した。

恒心館内には全共闘の男女学生約200人が泊り込んでおり、屋上や窓から投石したが、間もなく抵抗をあきらめ、20分後には機動隊が館内の捜索にはいり、火炎ビン約150本、鉄パイプ60本、投石用の石トラック2台などを押収した。

全共闘学生たちは全員裏庭の広場に集合、間もなく約100メートル北側の広小路学舎にはいり、正門、西門などのバリケードを築いて同キャンパスを完全に封鎖した。

一方、機動隊の立入りを知った、一般学生、学友会側学生らは、次々に登校、各門で全共闘と激しく投石、学生同士がなぐり合うなど混乱、双方にけが人が出た。

この衝突を見守っていた機動隊約300人は、正午マイクで大学側の退去命令を伝えたあと、まず西門のバリケードと金網を乗越え約100人の機動隊員が構内にはいり、続いて正門からの金網を乗越えて次々と構内にはいった。

バリケードの中にたてこもっていた全共闘学生たちは鉄パイプ、角材を振り上げて激しく抵抗、7人が公務執行妨害現行犯で逮捕された。

学内の乱闘は機動隊の出動でいったんおさまったが、大学側は「警官の立ち入りを認めない」と府警に退去を要請したため、午後零時20分、機動隊は学外に引揚げた。

このあと学内は再び全共闘と学友会側学生が対立、乱闘や投石を繰返してますます混乱を深めた。

大学側は全共闘にマイクで「すぐ学外に立去りなさい」と命じ続けた。

この日の府警の捜索は3月18日全共闘学生が学友会学生の泊り込んでいた広小路学舎の研心館自転車置場に火炎ビンを投込み守衛室に放火3月20日興学館のとびらをこわし、ガスのゴム管の先に火をつけ応接室を焼いた4月8日研心館に乱入、泊り込んでいた学友会の学生、職員に暴行した、などの容疑で大学側も捜索を認めた。』

【“わだつみの像”を返せ 立命館大 破壊学生を責める】1969. 5. 21 毎日新聞（引用）

『「わだつみの像をなぜこわした」「あんな像にいま何の価値があるんだ」

機動隊の立ち入りで荒れた立命館大広小路キャンパスで20日の午後、逃げ遅れた全共闘学生をつるしあげる学友会と一般学生。

かみあわぬ議論と怒声の中で、傷ついた“反戦の像”の表情はわびしかった。

“わだつみの像”は戦没学徒の手記「きけわだつみのこえ」出版を記念して本郷新氏が制作、東京大学に立てるはずだったが学内の一部に反対があつて中止、当時の末川博立命館大総長らが昭和28年、同大にひきとり、立命館民主主義を象徴するものとして親しまれてきた。

この像を20日午前9時ごろ、機動隊と争った全共闘の学生が破壊したのだ。

倒された像が左腕をもぎとられ、頭部にぽっかりあいた穴には花がさしこまれ、胸には赤ペンキで「死」の文字が書き込まれる無残さ。

全共闘学生も、末川前総長への激しいつるしあげをしなかったように、像の破壊だけは控えていた。

しかし、いま全共闘学生の1人は「像が立命館民主主義のシンボルであるかぎり、死ぬ運命にあつた。立命館民主主義の死は機動隊の乱入であきらか」と語るようになっていた。

機動隊が再び出動して全共闘学生を排除した午後3時過ぎ、逃げ遅れた女子学生2人が“わだつみの像”のあつた台座のそばに連行された。

たちまち学友会と一般学生たち4.50人が取囲む。

別の学生がキャンパスの片すみに、こわされたままになっていた“わだつみの像”を運んできた。

「これを見ろ」2人に、無残に穴があいた頭ともがれた手を見せる。

学友会側の学生の1人が「これから全共闘の弁明を聞こう」とマイクで声をはりあげた。

周囲の学生の数は約500人にふくれ上がった。

全共闘派の女子学生がさらに1人、男子学生が4人連れてこられた。

なかには応援にきた府立医大生もいる。

「君たちはなぜ像をこわした」また怒りの声がとぶ。

マイクを握らされた1人は「わだつみの像がいったい立命館大でどんな役割を果たしたんだ」と叫んだ。

すかさずやじと怒号が渦巻く。

“争点”のかみ合わない押し問答は1時間半にわたって続いた。』

全共闘は、この日(5月20)以降、京大に亡命することになる。

6月28日、立命館大学全学共闘会議法学部闘争委員会の機関誌「CONTESTATION」(コンテストション)が創刊される。

この機関誌はホームページの「全国学園闘争図書館」コーナーで見ることができる。(つづく)



前回まで立命館大学闘争を紹介してきたが、立命館大といえば、この人が思い出される。「二十歳の原点」を書いた高野悦子さん。(写真は週刊読書人から転載)

69年1月から5月にかけて、彼女も立命館大共闘の一員として闘争に参加していた。

そして69年6月24日、貨物列車に飛び込み自殺。二十歳であった。

彼女の手記は今でも読まれているが、この手記がベストセラーになった時期、「週刊読書人」に掲載された書評があるので見てみよう。

【無名の死。風化した死】1971. 8. 16 週刊読書人(引用)

『高野悦子著「二十歳の原点」(新潮社)がすでに8万部を超えるベストセラーになっている。

いったい、なぜ若い世代は、彼女の死に魅かれ、その手記を読むのか。

読まれる原因がひそむ状況の中に、実は大変な頹廃があるのではないか。

その頹廃は高野悦子の死を変貌させてはいないか。

ここでは彼女の死の周辺を分析する。

「戦いか然らずんば死。血みどろの闘争か然らずんば無。かくの如くに、問題は厳として課せられている。

ジョルジュ・サンド」

高野悦子の手記「二十歳の原点」を読むにつれ、このジョルジュ・サンドの言葉を思いださずにはいられない。

本当はこの手記を読むべきではなかったのではないかと、暗い憂うつな思いにもとられるのである。

なぜなら、読めば読むほど、こういうふうにとり上げれば、とり上げるほど、高野悦子の死はますます“風化”し、色褪せて、彼女自身、手記の中で書き記したように「自殺は敗北であるという一片の言葉で語られるだけのものになる」(6月1日)からである。(中略)』

筆者は“風化”の原因として、1番目に高野悦子の手記を商業出版として遺族が出すことを決めたことと断じている。

同じ6月に遺書もなく、手記もメモも焼却して“無名者”として自殺した早大生の死と比べ、“死”が商品に

なる、これが風化でなくてなんであろうかと。

2 番目に彼女の死について勝手な解釈や想像を加える人間やメディアや登場である。

なぜ高野悦子は死を選んだのか？実のところは当の本人以外分かるはずもないのだから。

3 番目に読書側の頹廃した二つの対応、ひとつは「二十歳の原点」を作品として読んでいないかということ。

『たとえどんなに秀でた作品であっても、作品は作品である。

現実の「闘い」に己の死を賭け、生身をさらして書いた独白とは、あるいは、その一語一句にひとりの人間の重い現実がのしかかっている手記とは、自ら次元を異にしているのだ。

その手記にはまごうことなきひとりの人間の生があったはずである。「手記」が、そして現実にあった死の重みが、一片の虚構の中の生と死と同様に読まれること、これは“風化”した死に他ならないだろう。(中略)』

そしてもうひとつの読者側の頹廃とは

『これが高野悦子のおかれていた心的状況であった。

三つのモチーフ、孤独感、生への不安(絶望)、そして終末感、これらは実は、70 年安保も敗北し、一時の大学闘争の連帯感も喪失し、生きてはいるが、かといって確固たる展望も持ち合わせない、現代の若い世代の心的状況にぴったりと相応しているのである。

この三つのモチーフへの共感は、とりもなおさず、実は自らに対するいつくしみと慰みにほかならない。

手記を媒介にしての、手記を自らを写す鏡としてのこの自己憐憫、自己慰安、これこそ読者自身のもうひとつの頹廃である。

生者たる読者のための安逸の手段と化した高野悦子の死、これは最悪の状態まで“風化させられた死”といえるだろう。

樺美智子しかり、奥浩平しかり、山崎博昭しかり、そして高野悦子の死も風化しつつある。

もはや、これ以上の“風化”は防がねばならぬ。

もう一度、冒頭にかかげたジョルジュ・サンドの言葉に立ち戻って、考えねばならないだろう。

戦いか然らずんば死。血みどろの闘争か然らずん無……。』

最後に、全共闘白書に掲載された立命館大学全共闘の皆さんの発言を紹介して、終わりにしたい。

【全共闘白書】(新潮社発行 全共闘白書編集委員会編) (引用)

『「ぜひ発言したいこと」という質問に対する回答(抜粋)

<立命館大学> 67 年入学

全共闘運動がアツケなく(と私は思っている)終わってしまったのは何故だろう、またどうすればもっと現在も続いているような運動になっていたのだろうか、いつも当時を思うと考えてしまいます。

67 年入学

以前は団塊の世代はみんな全共闘をやっていた連中と同じ気分と信じていたが、どうやらわれらが全共闘は少数派のようだって最近気付いた。』

「二十歳の原点」については、<1969-1972 連合赤軍と「二十歳の原点」>というサイトがあり、この手記について非常に丁寧に語られている。

黒を基調としたモノトーンのデザインで、トップページにあるヘルメットを被った女性がタバコを吸うシルエットが印象的なサイトである。(リンク参照)(終)



全国学園闘争シリーズの9回目は関西大学。

関西大学は1886年に創立された関西法律学校を起源とする大学で、1922年に大学令に基づく旧制大学となった。

関西私学を代表する「関関同立」(関西、関西学院、同志社、立命館)の一つである。

この関西大の様子が、朝日ジャーナルの「学園ハガキ通信」に載っているのを見てみよう。

【学園ハガキ通信】朝日ジャーナル 1969. 8. 3号(引用)

『関西の日大闘争 <関西大>

6月20日以来全共闘に封鎖されていた関大本部は機動隊導入により7月5日解除された。

この全共闘の闘いは関大の学内支配体制＝右翼ファッショ的支配体制(体育会応援団の学内機動隊を駆使して意識的學生を暴力的に抹殺)＝大学立法の先取りの体制を打破する闘いであった。

まさに関大80年とは、裏をかえせばそのような血にぬられた暗黒の歴史なのである。

それを端的に示すのが次のような事件である。

登校の電車内で「朝日ジャーナル」を読んでいたところ、関大前駅に降りたとたん一緒に乗り合わせていたらしい体育会系学生3人に取囲まれた。

そして全共闘か？学生証を見せろ(持っていなかった)とか何の権利もないのに高圧的に胸ぐらをつかみながらいい、違う、一般学生だと答えると(はっきり言え、体育会本部で調べたらわかる。全共闘やったら命ないものと思え、関大体育会をなめるな)などとならべたてた。

結局三発なぐられただけで“釈放”になったが、捨てゼリフに、赤がかった本読んでたら一般学生でも2,3発なぐられても文句言えないぞとおどかして帰っていった。

まさにこの言葉こそ関大80年そのものをあらわしているといえよう。』

関西の日大闘争という「学園ハガキ通信」への投稿を受けて、翌月の朝日ジャーナルに関西大のルポ記事が載った。

【苦悩する個別学園闘争 関西から】朝日ジャーナル 1969. 9. 21号(引用)

『日大ミニチュア版 関西大

しばらく前の本誌「学園ハガキ通信」欄で「関西の日大闘争」と題した記事をご記憶でしょうか。

電車の中で右翼学生におどされた学生の話です。だからボクも日大闘争のイメージを頭にえがきながら関大へむかいました。

が、千里山のキャンパスについてまずびっくりしたのは、その広々として見晴らしのいいことで、この点で

は全国の大学の中でも十指に入るのではないのでしょうか。

キャンパスなしの校舎にぎゅうぎゅう学生をつめこんでいる日大とは、全然様子が違いました。

全共闘の学生がたむろしている建物はすぐわかりました。三階の窓からハシゴで出入りしていたからです。

7月5日、機動隊が入って全共闘が封鎖していた関大会館は解除されたのですが、その後、誠之館(学生会館)、法・文研究棟、社研究棟を封鎖して現在にいたっています。

学生たちの話いろいろ聞いてみますと、たしかに日大闘争を小型にしたような点があります。

関大でも前近代的な学生支配の制度の告発が闘争の基調になっています。

ビラや集会の届け出制などを定めた学生規則の撤廃が5項目要求のはじめにあげられています。

もっとも関大の学生支配構造は日大ほど露骨ではありません。

学生が学生を支配するという構造になっており、その意味では日大より巧妙なのかもしれません。

6学部の自治会の上部機関として各自治会やサークルの予算の配分を牛耳っている中央執行委員会があります。

学生投票で選ばれた中央委員会のメンバーで構成されるのですが、その選挙がいままで相当インチキなものだったらしいのです。

投票時間も短時間、場所も1ヶ所に制限、体育会、サークルなどの組織票だけが入るような仕組みになっていたそうです。

こうした不正選挙をめぐる闘争が昨年来続き、商、文、社会学部の自治会などが中心となって、中執の支配から完全に離脱しようという動きがあったのです。

ことしの4月、大学立法反対をひとつのバネに、関大でも新しい学生の自治体を創設しようとする動きが活発になり、それが6月14日に6学部闘争委員会(後に関大全共闘)による大衆団交要求という形に発展したわけです。

大学側はもちろん拒否、6月20日の第2回目の申し入れも拒否、その日に関大会館を封鎖という形にエスカレートしました。(次回につづく)』

【キャンパス情報】毎日新聞 1969. 6. 21 (引用)

『関西大体育会系が学生組織を牛耳っていたが、学内民主化を叫ぶ反日共系学生たちが20日、全共闘を結成、理事長室や本部事務局などがある大学会館を封鎖した。同大学では、今年二月にも反日共系学生が社会学部学舎を封鎖したが、こんどは反体育会感情をむき出しにした紛争で、今後学生どうしの衝突が心配される。』(写真は毎日ムックから転載)(つづく)



前回の続きです。

6月20日に関大会館を封鎖した全共闘は、翌日一旦撤退したが、6月22日、再度封鎖に踏み切る。(写真は毎日グラフから転載)

【関西大再び騒然 全共闘、体育会系とこぜり合い】毎日新聞 1969.6.23 (引用)

『封鎖さわぎが一段落したばかりの関西大学で22日朝、再び全学共闘会議派の学生が関大会館を占拠、表にバリケードを築いてたてこもり、封鎖に反対する体育会系学生と深夜までにらみあった。

このため大学側は緊急部局長会議を開き、両派が衝突したときは、警察の出動を要請することを決めるとともに、実力行使を避けるよう説得をつづけた。

全共闘(文、社会、商三学部自治会と五学部闘争委員会で組織)は21日午後7時すぎ、バリケード封鎖中の関大会館から自主的に撤退、姿を消したが、22日午前10時ごろ、“外人部隊”を含め約150名のヘルメット学生を動員、会館を再占拠した。

このあと全共闘は会館前の広場に立てカンバン、机などでバリケードをつくり、館内に角材、鉄パイプ、石などを持ち込み、さらに小型トラックで食料を運び込んで長期封鎖の体制にはいった。

一方、体育会、文化系の学生約500人も約400メートル離れた体育館やサークル館3ヶ所にたてこもり、通路にバリケードを築いてにらみあった。

両派の学生は夜にはいってから再三鉄パイプなどをふりかざしてこぜりあいを繰返した。』

【キャンパス情報】毎日新聞 1969.6.24 (引用)

『機動隊導入を決議

<関西大>全共闘(反日共系)が大学本部を封鎖しているが、学友会執行部(体育会系)は23日、全学集会を開き「機動隊導入を大学側に要請する」と決議した。

全学集会は約五千人の学生が参加、杉原四郎教学部長、桜田誉学生部長らも出席した。

全共闘はこの決議に強く反発しているので、紛争はいつそうこじれそうだ。』

【苦悩する個別学園闘争 関西から】朝日ジャーナル 1969. 9. 21号（引用）

『日大ミニチュア版 関西大

（前回よりつづく）このときの学内の右翼勢力と全共闘のゲバでは日本刀が登場するなど日大的なシーンがあったらしいのです。

このあたりから、いくつかのサークルが続々学友会離脱を宣言するなど、中執による支配体制が事実上崩壊をみせはじめののです。

一方、大学側の内部はバラバラで、法、文、商の教授会は機動隊導入に反対の決議をするしまつ。

日大ともっとも違うのは古田会頭的な人物が関大にはいないことかもしれません。

結局、中谷敬寿学長、桜田誉学生部長ら執行部は8月30日に辞表を提出してしまいました。

9月8日、法、経など一部授業再開の動きが出はじめましたが、全共闘は妨害戦術に出ており、まだまだ情勢は混沌としています。

ところで関大は万博会場に近く、学外では関大闘争が万博反対にどう結びつくか、関心のまとなのですが、学生たちは、基本的には反対していてもさて具体的にどうするかということになると相手がでかすぎで・・・と苦笑していました。』

闘争とは直接関係ないが、万博に関連して新聞にこんな記事が載っていた。

【関大全共闘、手配師に食われる】毎日新聞 1969. 8. 14（引用）

『万博工事 保釈金かせぎ二百人タダ働き

逮捕された学友たちの保釈金をかせぐため。関西大学全学共闘会議の学生たち延べ228人が、24日間も万国博の国連館建設現場で働いた。

ところが、いっこうに金を払ってくれず、全共闘で調べたところ、この仕事をあつせんした手配師が金を持ち逃げした疑いがでてきた。

学生たちが働いたのは熊谷組の下請会社、柏田工務店の建設現場。全共闘のメンバーの1人N君＝社会学部三回生＝が国鉄大阪駅で手配師の「西田」という男から「万国博会場でいい仕事がある」と持ちかけられ、仲間と相談した結果、逮捕された学友の保釈金や闘争資金に使う目的で、全共闘あげて働くことを決めた。

学生たちがこの話に乗ったのは、日給2,300円（食事付き）という条件だったため、口約束だけでとびついた。

全共闘は封鎖中の同大学社会学、法文研究室に泊まり込んでいる学生たちを、先月18日から毎日平均10人、柏田工務店に派遣、万国博会場内で土運びやアナ掘り作業をした。

給料日の今月10日、学生が柏田工務店に給料をもらいに行ったところ、日当は手配師が約束した1日2,300円ではなく1,100円と半額で、しかも食事代（350円）を差引いて、たったの750円という説明。

この抗議で寝耳に水の柏田工務店社長、柏田定利さんが調べたところ、先月分の給料は、すでに会計係から手配師の「西田」に支払われていることがわかり、保釈金も皮算用に終わりそう。

自分たちが汗を流した国連館の壁に「万国博粉碎」と書きなぐったのが精いっぱいウサ晴らしだった。』

（終）